

森 容香さん、当時5歳。爆心地から およそ1.8キロ。楠木町にあった自宅で被爆しました。森さんは、家族で朝の食卓を囲んでいた時「8時 15分」を迎えました。

猛烈な爆風で一瞬にして家は倒壊。避難した場所には、ケガややけどに苦しむ多くの被爆者で溢れかえっていたと振り返ります。家族で移り住んだ父親の故郷でも決して、楽な生活は送れませんでした。

森さんは強く訴えます。「核の抑止力」というのは、保有国の幻想だと。戦争がある限り「核兵器」は無くならない。だから、戦争の無い世の中にして欲しい…。それが被爆者としての唯一の願いだと言います。

【戦時中の暮らし】

原爆が落ちるまでは、広島は、すごく暮らしやすい、いい町だったんです。両親がそろっていて、きょうだいがいて、幸せな家庭だったのです。子どもが4人も5人もいるような父親を(国が)戦争に取り上げるというのは、あってはならないことだと思います。そんなことをして戦争に勝てるはずがないじゃないですか。大きなアメリカと小さな日本が戦争をして、勝てるはずもないのに、国民には日本は戦争に強い国なんだと思わせていたのです。(当時は)国民が戦争をしたらいかんと言ったら、非国民だとか、言われる状態だったのです。

父が戦争に行くときには、何も知らずに小さな国旗を持って、なぜか決まったように「勝ってくるぞと勇ましく～」という軍歌を歌っていました。一緒に歌って、送り出したのを覚えています。父が戦争に行くまでは、B-29 が広島の上空へ来るようなことは記憶にないのですが、父が戦争に行ってから、(B-29 が)来るようになったのを覚えています。夜、電気をつけるときには、傘に布をかぶせなさいとか。大事なものを収めておく蔵は白壁ですが、その壁も黒に塗りなさいとか、父が戦争に行ってから、生活が変わっていきました。

【8月6日】

8月6日は、夜中の0時何分かに空襲警報が鳴りました。飛び起きて、防空頭巾をかぶって、避難しました。そのときは2時間ぐらいでしょうか。B-29 がどこか行ったので、解除になって、私はもう一度、布団に入ったのを覚えています。その日は、また空襲警報が鳴りました。今までは、そんなことがなかったのですが、1日に2回も鳴るといことが、その日はあったのです。それが朝の7時9分ぐらいだったでしょうか。また飛び起きて、防空壕に避難しました。そのときは、時間が短かったのです。B-29 が、広島の上空を通り過ぎただけでした。その時でも空襲警報が鳴ったのに、8時 15分のときには鳴りませんでした。

そして、突然です。8時15分、ピカッドーンと落ちたのです。7時9分に2度目の空襲警報が鳴って、そのときは20分ぐらいで解除になって、みんなほっとしていました。2度目の空襲警報でもう疲れていたのです。私たちは朝食中だったので、家の中にいました。天井の屋根が落ちてきたら、即死していると思いますが、不幸中の幸いとも言うのか、たまたま、台所の一部がしっかりした造りだったこと、屋根が斜めに落ちたから助かりました。部屋の狭いところに(みんなが)吹き飛ばされて、集まっていました。その日は長女が風邪をひいて別の部屋で寝ていました。でも、気が付いたときには、(同じ部屋へ)飛ばされてきていました。

とにかく、竹やぶへ一時避難しようということで、下敷きになった家屋から外へ出ようとなりました。外の光が入ってきているところが一部あったので、まずは長男がはい出て、外から兄が引っ張り、中からは母が(子どもたちを)押し出すというかたちで、みんな助け出されました。そのとき母が、朝の8時台は、どこの家もまだ火を使っているところがあるはずで、そこへ天井屋根が落ちたのだから、火の手がすぐ上がる。もう一刻も早くこの場を離れないといけないと言いました。長女は弟を抱っこしています。長男と母は2人で、もう一度、がれきの下に潜り込んで、何か一つでも取り出せるものがあつたら、取り出そうとしました。

母は子どもの足は遅いからと考えたのだと思います。「じっと待っていないで、早くあなたたち二人は、竹やぶへ行きなさい。あとでお母さんたちも行くからと。」と言いました。私は、母と離れるのが嫌だと言いました。怖い思いをしたので(母から)離れたら、もう会えないかも知れないと言いましたが、母はそんなことを言わないで、秀香(姉)と容香は竹やぶへ行きなさいと言ったので、姉と二人で手をつないで避難しているところを高校生が絵に描いてくれました。私は、泣きながら(歩きました)。家の外で直爆を受けた人が即死していたり、全身やけどで、皮膚が垂れ下がった人は喉が渇くから、水をください、水をくださいと言って歩いていました。そんな中を、私たちは二人で竹やぶへ向かいました。

足元には死体があつたり、まだ、がれきの下にいる人たちがいました。私たちは外へ出られましたが、下敷きになって、まだ生きている人もたくさんいるのです。助けて、助けてと、あちらこちらから言っている状況です。でも、何もできません。道があつても、ないのと一緒です。家がみんなつぶれているので、破片はあるし、死体はあるし、そんななかを姉と二人で手をつないで、どうにか竹やぶへ行きました。竹やぶへ行ったら、兵隊さんもけがをして横になっていたり、家を失った人などみんなが来て、右往左往しているわけです。きょうだいや親を捜しながら、名前を呼んでいました。やけどをしている人は、水が欲しいので、太田川へ飛び込んで、そのまま死んでしまつて浮いていました。まさに生き地獄です。そんな人たちでごつた返した竹やぶの中を姉と二人で歩いていたら、私たちが先に竹やぶに行ったはずでしたが、母と兄と姉、弟とばつたり出会ったのです。

家族みんな元気で、大きなけがもなく、よかったと思っていましたが、その竹やぶには、食べるものがないのです。薬もない、何もないわけです。そこで母が、いつまでもここにも仕方がないから、父の田舎(県北の八千代)へ行こうと言い、そちらの方面へ歩きだしました。広島市内から離れると、家もつぶれていません。学校で炊き出しがあって、おにぎりをいただき、食べながら、ひたすら歩き続けました。しかし、8月の炎天下で、足は痛いし、喉は渇きます。朝食もまともに食べていなかったのも、ただ喉が渇き、おなかが空いていて辺りの畑のトマトを取って、それを食べながら歩き続けました。(食べ物に)放射能がついているかもしれないのにね。

泣きながら、母の服の裾を持って歩いたのを覚えています。弟は1歳なので、誰かが交代で抱っこをします。でも、5歳の私は誰も抱っこはしてくれません。おまえは歩けと言われて、泣きながら歩いたのを覚えています。

母は、15歳のとき、すでに両親が他界しています。一人っ子の一人娘でした。だから、頼るところが父の田舎しかないのです。(当時の)高田郡八千代町というところなので、そちらの方面へ向いて歩きました。可部あたりまで行ったところで、夕方になり、その集落の方たちは、(被爆避難者)が来たら、面倒を見なさいという命令があったのか、なかったのかは定かではありませんが、皆さん、よくしてくださったという記憶があります。(県北方面行き)トラックの用意ができたのが、1週間くらい後だったでしょうか。車の手配ができるまでは、そこ(集落)でお世話になりました。被爆者というのは、ある日突然、ピカッで何にも無くなるのです。寝るところがない、着る服もない、食べるものも、お金もない。ただ残ったのは、放射能を浴びた体だけです。

【父の実家へ、田舎での生活】

どういうところかも知らないのだけど、そこ(父の田舎)しか頼れるところがないのです。戦争に行ったら、当時はもう死ぬものと思っていましたから、祖父母もそれは大変です。祖父母も、父が元気で帰ってくるとは思っていませんでした。何の連絡もありませんでした。もう死んだのだろうという感じてました。だから、祖父母の母に対する態度が冷たかったです。それは子どもながらには私はわかっていました。母は大変、つらい思いをしたと思います。

そんな生活をしているのを町の偉い方が気の毒に思って、私たち親子にバラック(小屋)を川辺に建ててくれました。バラックには電気も水道もありません。ただ雨風をしのぐだけです。それでも母にすれば親子水いらずで生活できるのがよかったように思います。私たちも学校から帰ったら、山に薪を拾いに行ったり、ワラビ採りに行ったりしました。昔は、山へ入るのは自由でしたから、いろいろなものがありました。栗も拾いました。生活は川の水でしていました。飲むのも、洗濯も、何もかも川の水です。

祖父母のところから避難したあとのことですが、(広島市内の)自分の家を見に行く人もいました。だけど、私たちには余裕がありませんでした。母は子ども5人を養うのに一生懸命で朝から

晩まで仕事をしていました。当時は農家のお手伝いしかありません。朝早くから夜遅くまで、1日お手伝いをして、米1升をもらうのですが、子ども5人と母の6人の生活では、食べ盛りがいますし足りないのです。母は大変だったと思います。(体の)あそこが痛い、ここが痛いと言いながら、一生懸命に働いている姿を見えています。

(父は)戦死したと思っていたのですが、2年くらいして帰ってきました。どうしていたのかと聞いたら、広島までは帰っていたそうです。ところが、自分の家があったところへ行ってみると何にもない。もう(家族は)死んだと思っていたそうです。(爆心地から)2キロ以内は全滅だと言われていましたから、もう、みんな死んでしまっている。それならば、田舎へ帰ってもしようがないと思い、広島市内で一人で暮らしていたようです。そうしたら、田舎の知り合いが偶然に広島で父に出会い、「おまえは何をしているのか、こんなところで。(家族)みんなは元気だぞ」と聞いて、びっくりして田舎に帰ってきたら、みんながいたわけです。私は中学を卒業するまでそこ(八千代町)にいました。

【就職で大阪へ】

農家でないものが、田舎で農業の生活をするというのは非常に難しいことです。当時はお金持ちの子しか高校へは行けなかったので、中学校を卒業すると働くのが普通でした。私は東洋紡に集団就職しました。それからずっと大阪に住んでいます。(昭和)19年生まれの弟が(中学校を)卒業したら、(家族で)もう町へ出ようという話になっていました。弟が卒業して、弟も大阪へ就職しましたので、父母も大阪へ出てきました。

【被爆者ということ】

それまで田舎でも同級生が突然いなくなって、先生に聞いたら、入院しているというのです。甲状腺の病気で、喉がなくなるくらい腫れているのです。お見舞いに行きましたが、それきりでした。学校には戻ってくることなく、亡くなったという話を聞きました。もう、怖かったです。原爆というのは、不思議とうつると思われていました。近くにいない方がいいよ、うつるよ、と言われ、嫌がられるので、母は、あまり原爆に遭ったと言わない方がいいと言いました。

成人してから、結婚が決まっていた友達で、親が(被爆したことを)知って、突然破談になったといった話をたくさん聞きました。だから、私自身も就職しても(被爆のことは)あまり言いませんでした。

原爆に遭ってから、母は病気がちでした。頭が痛い、頭が痛いと言っていました。結局、がんで亡くなるのですが、被爆者は、がんになりやすいと聞いています。姉2人もそうです。みんな、がんで死にました。母は、親も早く亡くして、きょうだいもいない一人でした。父が頼りだったのに、父を戦争に取られて、無事には帰ってきましたが身寄りがありません。母は苦勞の連続でした。

私も甲状腺を病んでいます。健康診断でわかりました。私の場合は、それから薬をずっと飲んでいます。甲状腺が怖いなど思ったのは、初めは、小さな白い錠剤を1日に半錠から飲み始めました。半錠が1日ということは、相当きつい(薬)だと思います。その薬を飲みだして、今は1日に1錠半になっています。

【平和への願い】

もう被爆者には時間がないのです。だから、命のある限り、戦争はしてほしくないです。だから、(反戦の)運動をしていこうと思っています。今後、絶対に戦争はしてはいけませんし、戦争をして得るものはありません。人が死んでいくだけです。私たちが被爆したときと違って、今、戦争をしたら、(地球が)なくなってしまう。日本だけではありません。だから、絶対、(戦争は)あってはいけないと思います。なぜ、人間は話し合いができないのでしょうか。それが残念です。話し合っ、仲よくやっていけば戦争なんて起きないと思います。現在も戦争をしているところがあります。

日本には、憲法9条があります。もう、9条を変えたら、絶対に戦争に向かっていってしまいますから、だめです。今、また署名を集めようと思っています。9条を変えてはいけないという署名です。

やはり、被爆2世の会も立ち上げて、ちゃんとやっていかないといけないというのは、絶えずありました。私たち親の会でも、何もしなかったら、政府は何もしてくれません。こちらが運動を続けて、やっと今があるのですから。